

柔道一筋に生きた人



徳

三

宝

講道館の名物男

今日、世界の各国で行われている柔道は、一八八二年（明治十五年）、嘉納治五郎によって始められた講道館柔道です。柔道は、明治・大正・昭和の三代を通じて日本中に広まり、最近では、女子柔道・少年柔道も盛んになって、柔道を楽しむ人々は増えています。

一九五二年（昭和二十七年）には、国際柔道連盟（IJF）が結成され、現在、加盟国は八十をこえています。世界柔道選手権大会も開かれており、また、東京オリンピック大会からは、競技種目にも採用され、柔道は、今や世界のスポーツに飛躍したわけです。

世界柔道のメツカは、東京都文京区春日町にある七階建ての大講道館ですが、この講道館にも、永昌寺から南神保町、上二番町、富士見町、真砂町、下富坂町、水道橋の各時代がありました。そして、講道館には、その創始以来、強いといわれた柔道の名人・達人は、幾人、幾十人あつたかもしれません。「姿三四郎」のモデルといわれる西郷四郎も強かったし、鬼横山といわれた横山作次郎、天才と称された永岡秀一、また三船久蔵も古今まれに見る名人でした。その中でだれが一番強いということはいいい難いが、徳三宝（九段）ほど、講道館の名物男として、その名をとどろかせたのは、他にはないでしょう。

第一、徳三宝という名前そのものが特異です。おそらく日本中に、ただ一つしかない珍奇な

ものでしょう。でも、徳三宝という名前には、いかにも強そうな響きがあり、その名前を聞いただけでも、**猛者・強剛**を感じさせるものがあります。明治の末期から大正・昭和の初期にかけて、徳三宝の名は、天下の柔道人の間に広くその名を知られていたのです。



柔 道 着 姿

しかも、名前そのものが特異であつたのに加え、その身体も類まれなるもので、身長五尺九寸弱（一七六センチ）
体重二十五貫（九十四キロ弱）と、そのころの柔道家としては、身長体重ともに抜群でした。もちろん、今日の柔道選手としたら軽重量級であり、特別に大柄とはいえないけれど、半世紀も前のことです。引き締つた筋肉質な体

格、顔も胴体も脚部も、色が浅黒く、目が大きく眼光は鋭く、古代の熊襲を思わせるような顔をしてゐる上に、腕力が強く、技は、あくまでも強引で大きく切れ味がよく、それに無類の稽古熱心ときているので、講道館道場に突立つた徳三宝の稽古着姿には、いつも王者のみの持つ独特の雰囲気（なまけ）が漂っていました。そして、徳三宝の稽古着姿を見たものは、「とてつもなく強

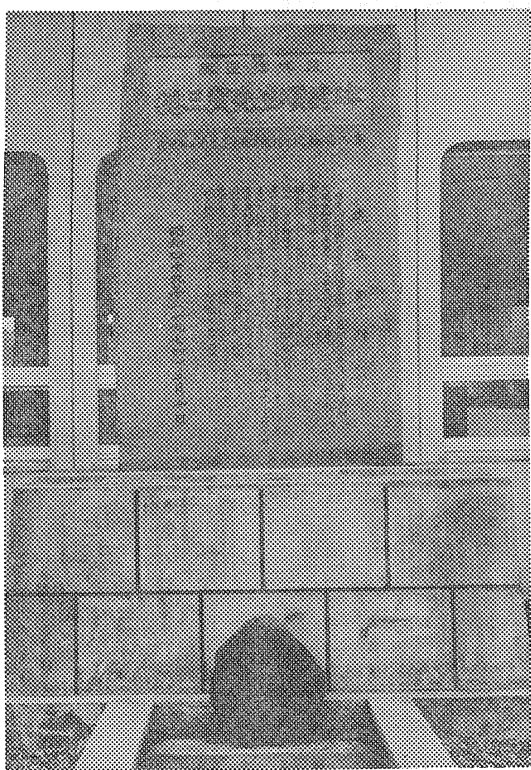
い男」と言って驚嘆したものでした。

生い立ちとエピソード

徳三宝は、一八八七年（明治二十年）、徳三^{みわ}和豊^{とよ}の長男として、徳之島の天城町兼久で生まれ亀津で育ちました。子どものころの呼び名は三宝^{みたか}といい、無口な子どもでした。おとなしくはあったけれども、子どものころから不正とか差別とかは決して許さず、自分にも他にも厳しいものを持っていました。小学校のころは、そんなに人並みはずれた大きな体ではなかったけれど、がっしりしたいい体格をしていました。



天城中に建つ胸像



徳之島町役場前の砦徳碑

亀津の小学校を卒業すると、鹿児島一中の分校（現甲南高校の前身）に入学しました。

中学校では、はじめ剣道部に入りましたが、瞬（また）く間に上達し、上級生でも彼に敵（かな）う者がいなくなり、いつしか指南（しなん）をも凌（しの）ぐほどになりました。そのころ、こんな話があります。

彼は寄宿舎にいましたが、ある夜、火事が起つたのです。火のまわりが早く、彼が気づいた時、猛火は彼の寝ている二階をとりかこんでいたのです。廊下へ出てみたのだが、すでに逃げられなくなっていたので、室内へ引返し、竹刀を一本とって彼は窓へ出ました。窓から少し離れた所に立っている大きな松の木の、その大木の枝を、じつと眺めていたが、やがて気合一声「うおーっ」と叫ぶや、竹刀をふりかざし、松の梢めがけて打ち込んでいったのです。

窓から真直ぐに飛び下りたのでは、怪我（けが）をするにきまっています。もし怪我をしなくても、足首ぐらゐは折るでしょう。それを、こうした必殺の一剣を松の枝へ打ち込み、ふんわりと地に落ちて、かすり傷一つ負（お）わなかったのです。

だれに教えられたものでもなく、とっさの判断で、これをなした彼の才能は、実に天与のものであったといえましょう。

剣道が強くなって、全校の中でだれひとり相手になるのがなくなったので、やむを得ず今度は柔道に転じました。すると、これもまたすぐ相手がいなくなっていました。

まもなく、徳三宝の名前が、九州に知れ渡る日が来しました。一九〇五年（明治三十八年）秋

の全九州中等学校柔道大会に出場しての優勝です。その勝ちっぷりが、あまりにも強く、少しの危^{あぶ}な氣^げがなく、胸のすくような豪快なものであったので、その無敵ぶりに人々は、目を見張りました。また、その翌年の春の、七高（現鹿児島大学）や五高（現熊本大学）が主催する柔道大会にも出場して抜群の実力を発揮しました。このすい星のような徳三宝の出現は「中学生はおろか、高等学校の柔道部にも、彼の相手になるものはあるまい。」と人々を感嘆させ、武道を尊ぶ、鹿児島の人々を熱狂させました。

東京へ出る

徳三宝に柔道を教えた七高の柔道師範佐村嘉一郎（後^{のち}十段）は、彼に東京へ出て講道館に入るようにと勧めました。講道館へ入れということは、将来柔道家として身を立てるようになるようにとの勧めです。彼は上京を決意し、両親の許しを得るため、徳之島へ帰るのです。それは、彼が中学三年の夏休みも明けた九月のことでした。鹿児島から徳之島へ帰る巡^{じゆん}航^{かう}船^{せん}（今の定期船）の中で、すでに彼は小英雄でした。港に着くと、すぐに彼の帰省は、家の周りへ広がりました。柔道大会で優勝したことを知っている村の人々が、親しみを込めて出迎えてくれました。久しぶりにかぐ島の香りと、ふるさとの人情の暖^{まな}かさ^{ざし}と愛情の眼^{まな}差^{ざし}に深く感動を覚えました。そし

て、いま自分の抱いている大望——上京して日本一の柔道家になるという希望——を知ったらこの人達はどんなに喜ぶだろう。いや、もし自分が本当に日本一の柔道家になったらこの人達はどんなにか喜んでくれるだろう。そう考えると新たな希望と闘志が体の奥底から湧いてくるのでした。

彼は、まず母の説得にかかりました。佐村師範の話を伝え、自分も上京の意のあることを明かすと、「男は、なんでも自分の好きなことをやったらいい」と簡単に賛成してくれました。この分だと、父も賛成してくれるに違いないと、彼はほっと一安心しました。

彼の父は、鉾山師で、山を経営していたのですが、失敗して、今では鉾山発見のため、山から山を尋ね歩き、めったに家には帰ってきません。あくる日になって父がひょっこり帰ってきました。息子の来ているのが意外であつたので、「なんだ帰って来たのか」と喜びを顔に現わしながら、上へあがると、「どうだ勉強しているか」と尋ねました。この質問は、ちよつと勝手が違いました。いきなり勉強しているかと聞かれて、正直な彼は戸惑とまどってしまいました。

その彼の姿を、じろりと父は見つて「柔道もいいが、勉強をおろそかにしてはいかん。家の苦しい中から、学校へやっているんだからな。」と言うのでした。その言葉の意味は、早く学校を終えて家の面倒も見てもらいたいということと同じです。

当時の島の生活は貧しく、子どもを鹿児島鹿児島の学校へ出すのは、とても大変なことでした。ま

た、中学（今の高校）へ行くには、成績が優秀（クラスで一番か二番）で、さらに、家の財力がなければ不可能なことでした。青雲の志を抱きながらも、家運の衰微すいびや不運のため、学業半ばにして放棄ほうきしなければならなくなった人や、高い能力や才能を持ちながらも貧しきがゆえに、それを伸ばし得ずに朽くちていった島の先輩も少なくはなかったのです。

彼には、家の事情もよく分かるし、父の心が分かるのです。口下手な彼は、話し出す機会を失ってしまいました。彼は表へ出たが、全身の力が抜けてしまったようになり、ただ熱い涙がほおを伝って落ちるのです。ひよつとすると父は許してくれないかもしれないという気持ちもあつたけれど、上京の望みがなくなってしまったのだと分かると、悲しみと絶望、そして、やり場のない怒りのようなものに無性に腹立たしくなってくるのです。目前まで迫っていた東京が、遙はるかへ霞かすんでしまったのだと考えると、夢中で後を追いたくなる。それは、東京という都会の持つ、今も昔も変らぬ魔力まりよくであるかもしれません。

いや、そればかりではない。彼の耳に佐村師範の言葉が甦よみがえったのでした。「自分の才能がどこまであるのか、一生かかって磨みがくのが、男だ！」自分は、東京へ出て、日本一の柔道家になろうと志した。その望みを断たち切られたことが彼には悲しいのでした。

いつの間にか佐村師範の言葉が、彼の精神の支えとなり、「自分の力をふりしぼって、やれるだけは、やってみよう。」という気持ちを成長させていました。それが全身にいつか満ち満ち

た氣力を漲^{まさ}らせていたのを、少年の彼はまだ氣づかなかつたのでした。

いま、父に遮^{さへき}られて、初めて彼は自分の全身を支えているものが何であるかに氣づいたのです。自分というものを發見したのでした。

あす、鹿児島へ立つという日、父の前に座^{すわ}ると、いつになく彼は、火がついたように雄弁になり語り出しました。

「柔道は、ぼくの才能の全^{すべ}てです。ほかにぼくには、何の取り柄^えもありません。勉強も中位ですし、話をするのも下^へ手です。人の機嫌^{きげん}をとることもできません。佐村先生は、自分の才能を一生かかって試してみるのが男だ、と言われました。ぼくもそう思うのです。ぼくはやってみたいのです。」さらに彼は、話を進めました。「柔道をやつて日本一になれるかどうか、それは分かりません。分かりませんが、力の全てを傾けてやってみたいのです。」闘志^{どうし}と氣迫が満ちていました。

「日本一？」驚いて父は、息子の顔を覗^{のぞ}き込み、そして、

「お前は、日本一の柔道家になるつもりか？なれると思つていいのか？」と言う父の言葉に、
「そうです。ぼくは日本一になろうと思つています。講道館始まつて以来の強い男になります。佐村先生は、ぼくが修業^{しゆぎやう}すれば、なれるかもしれないと言つてくれます。それはこの足の親指です。」と、彼は父の前へ足を差し出して見せました。「この親指です。ぼくがこうして曲げる

と長くてハブの首のように曲るでしょう。講道館に西郷四郎という天才がいて、その人の親指が、こうなのです。この徳之島から、すぐれた柔道家をひとり出して下さい。」

父はしばらく考えていました。彼は嘉納先生が塾生として家に置いて下さることなどをも話しました。父は、軽い吐息ためいきをついて、

「この徳の家は、もと士族だった。その誇りを受け継いで、わしは家運を興そうとしたが、うまくいかなかった。そこでわしの志を、お前に継いでもらいたいと思っていたのだが、それほどまでに、お前が柔道をやりたいのなら、柔道でも結構だ。家の名をあげる立派な男になってもらいたい。」と一つ一つの言葉をかみしめるように言うのでした。

「それでは、東京へ行くことを許して下さいるのですか。」

「行くがいい。行った以上は、家のことなどは考えるな。自分の道さえゆけばよい。」この父の言葉に、彼は夢見ごこちでした。

あくる日、母は赤飯をたいてくれたが、それは彼の旅立ちの印しるしでもあったのです。郷土の先人の多くがそうであったように、彼にとつても、この旅立ちには前進あるのみで、決して退しりぞくことは許されない厳しいものでした。東京へ行ってしまうえば、またいつ会えるか分からないのだからと、港まで父や母、弟や妹そして村人までもが見送りに来てくれました。彼は多くの激励げきれいと島の人々の期待を担になって亀徳の港を後にしたのでした。

講道館入門

彼がはじめて講道館（下富坂道場）に入門した日、道場では、もう稽古が始まっていた。壁にはずらつと門人の名札が掲げられています。道場の一番高い所に師範席があつて、そこに柔道着姿の嘉納治五郎が控えています。彼の本格的な柔道生活が始まったのです。それに佐村師範の推薦によつて嘉納塾に学ぶことも許されました。

嘉納塾は、規律を重んじ、礼儀と労働の美風を養うために、厳しい訓練をしていました。朝は五時に起き、部屋や庭の掃除、廊下は冬でも水を使つてきれいにふき、便所も当番を決めてきれいにします。風呂の水汲みも一仕事で、井戸から水を運ばなければなりません。それがすむと広い道場の掃除、そしてやつと食事。それから学校へかけつけます。鹿児島二中から錦城中学へ転校していました。

彼の柔道の稽古は、人の目を見張らせるほど、激しいものでした。一日に三十本は下らず、四、五十本の日もあるのです。しかも鬼といわれた横山作次郎が、特別に指導をしたので、柔道の腕前は、めきめき進歩しました。

彼が錦城中学に移つた年の秋、校内柔道大会では、一級上の五年生を相手の五人抜きを苦もなくやつてのけたのです。並外れた素質がある上、稽古の鬼となつて練習に励むので、彼の実

力は驚くほどついたので。毎月行われる講道館の試合にも、その翌年（明治四十年）の春の紅白試合にも優れた成績をあげたので、すぐに初段を授けられました。明治四十一年には二段次の年の八月には三段と、彼の昇進の早さは、特別だったのです。

その年、嘉納先生が校長をしている東京高等師範学校に、柔道や剣道の教師を養成するため「体育専修科」が置かれたので、さっそく受験し、そこに入学しました。

彼は、腕力を鍛えるため、道場に二十キロ余の重さの鉄棒を備え、稽古のないときは、この鉄棒をぶんぶん回して体を鍛えていました。彼の生まれつきの才は、いよいよ磨かれ、地力を発揮してきたのです。徳三宝の名声は、講道館の中だけでなく、街の人々にも知れるようになって、広くその名が天下に響き渡りました。

このようにして、明治四十三年の正月には、講道館の鏡開きに三船五段との大試合をやったのでした。これによって実力が認められ、四段に昇進しました。

翌一九一一年（明治四十四年）五月、京都の武徳祭では、関西の雄田畑昇太郎五段と対戦、これは、試合前から大変な評判でしたが、はたして期待どおりの大試合になりました。この試合も、明治の末ごろの大試合として柔道史に残る名勝負といふべきものでした。

徳の破門事件

しかし、このように順調に、柔道家としての歩みが続けていた徳三宝に、思いがけない災いが起つたのです。明治四十三年の暮れの日曜日のことです。彼が風邪で寝ていると、小使が来て、「南米ブラジルの東洋艦隊の水兵が練習に来ました。」と告げました。彼らは、日曜日から講道館の強い人達も、外出していないだろうと見込んで、やってきたのです。風邪で休んでいた彼が、元氣盛りの水兵十五人を相手に稽古をつけたのです。水兵達は、ぽんぽん投げ飛ばされるので、とても自分達が学んだ柔術では、講道館の柔道にはかなわないと思い、中にはボクシングでかかってくるのも出るしまつです。とうとう、けんかみたいになつてしまつたのです。そのためブラジル側には怪我人も出ました。

それからしばらくたつて、ブラジル政府から、このことで抗議があり、海運省や外務省からも非難の声が起りました。また、彼が高師の生徒でもあつたので、文部省でも、このことを問題にしました。強いばかりが柔道ではあるまいという非難がまき起り、しかも、それが外部ばかりでなく、内部からも起つたのです。それで、講道館では、協議のすえ、ついに、「講道館への出入りを遠慮せよ。」と申し渡したので、彼は道場への出入りができなくなりました。

これを世間では「徳の破門事件」と言っています。高師からも退学を命ぜられ、彼は東京を

後にするのです。熊本に落ち、京都に流れ、そして四国に渡り、あらゆる試練に耐え、体を鍛え、技を磨き、精神的な面での修業も積み、やがて東京へもどってきました。

ふたたび東京へ

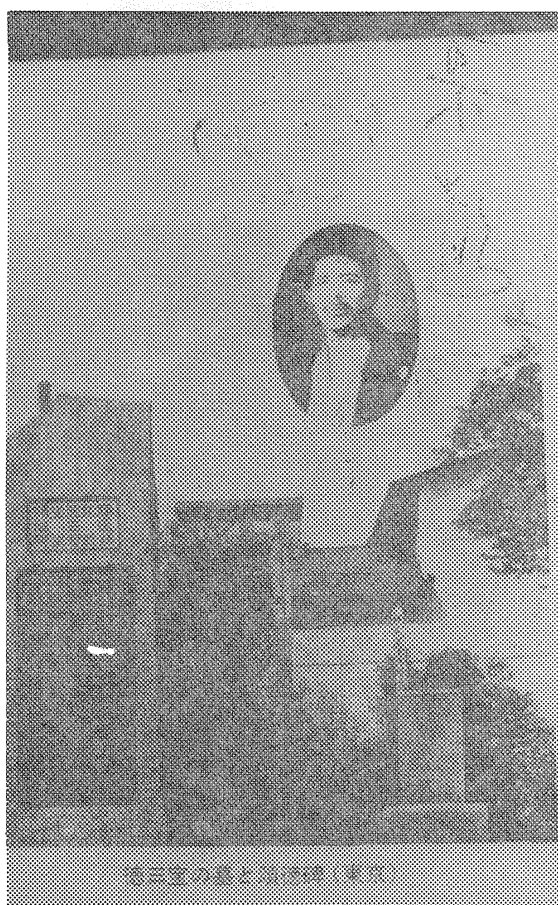
やっと待ち望んでいた「講道館の破門」が許されたのは一九一五年（大正四年）、彼が二十九歳のときでした。その翌年の鏡開きに、徳三宝は、新進の中の最強といわれる石田信三と対戦しました。すでに、三船・徳の時代が過ぎて、いまや石田信三と中野正三の時代が来たと噂（うわ）されているぐらいの剛（ごう）のものでした。

この模範試合も、引き分けに終わりましたが、試合が終わった後、石田は疲れきっていたのに比べ、徳三宝は、ほとんど汗一つかいていなかったということです。この試合の後、徳三宝・石田・中野・橋本（正次郎）の四人を、人呼んで講道館の四天王と称したが、その實力において、人気においては他を圧して抜きん出ていました。破門を許されてからの徳三宝は、以前に比べて、その人柄に柔らかさと幅が出てきたとも言われています。

やがて、その實力が認められ、早稲田大学（わせだ）の柔道の師範に招かれました。新しい住いを江戸川区小松川に定め、研道館（けんどうかん）という道場を開きました。その後、早大のほかに日本大学、拓植大（たくしき）

学、東京帝国大学農学部などの柔道師範を兼ねるようになって、柔道家としての生活が続きました。

昭和二十年三月十日、アメリカ軍の東京大空襲によって小松川の一帯は、一晩で焼野が原となり、徳夫妻も、烈しい戦火にまかれてあえなく死んでしまいました。その様子を見ていた人の話によると、付近の人を誘導して荒川放水路へ逃げ、老人や子どもの世話をやっていたという事です。この放水路を風によって走った猛火は、両側から放水路に逃げ込んだ人々をつつんでしまったのです。



徳三宝の墓と頌徳碑（東京）

翌日、多くの門弟達が、氣違いのようになつて遺体を探し求めたが、ついに分ならず、五十九歳で柔道家としての生涯を閉じたのです。

徳三宝が亡くなったのち、その徳望を慕う各大学の門下生達、講道館高段者有志、東京奄美会、研道館道場門下生一同等の働きによって、頌徳記念碑が建てられ、昭和三十二年の秋分の日

に、東京小松川の最勝寺^{さいしやうじ}で、法要除幕式^{ほうようじよまくしき}があげられました。

「徳三宝」山田克郎著（浪速書房、昭33）を中心に他の出版物及び、徳三宝の甥の指宿英造氏（名瀬市医師会長）指宿良彦氏（セントラル楽器店社長）の談話をもとにこれをまとめた。

執筆者

岡村隆博